川端康成学会　第 51 回大会　下田大会　　【発表題目・発表要旨】

主催　川端康成学会
後援　下田市・河津町
下田市教育委員会・河津町教育委員会

大会テーマ:「伊豆の踊子」の過去・現在・未来――研究・探求の道標に

日時　　8 月 24 日（日）　11:00～16:30
会場　　下田道の駅「開国下田みなと」4 F 会議室

【発表題目・発表要旨】

▼研究発表 1

「「南伊豆行」にみる「伊豆の踊子」と下田」　下田市職員　　渓口輝

「伊豆の踊子」は川端康成の代表作であると同時に、伊豆半島を代表する文学作品として、一世紀近くにわたり教育、観光、地域振興など様々な分野で広く親しまれてきた。

作品の初出は「文藝時代」大正 15 年 1 月号であるが、これは現在知られている「伊豆の踊子」前半の(4)までで、湯ケ野から下田へと向かう(5)からの後半部分は続く 2 月号に掲載されている。同 2 月号には「南伊豆行」という短い日記風の随筆も掲載されており、これには川端が「伊豆の踊子」の後半部分を執筆するにあたって、大正 14～15 年の年末年始にかけて南伊豆に旅した体験が描かれている。

「伊豆の踊子」の成立にこの「南伊豆行」が大きな影響を与えたことは、既に先行研究においても指摘されているところだが、今回の発表は下田を中心とした地元資料を手がかりとして、両作品の関係について再考を試みるとともに、作品のより豊かな“読み”を目指すものである。

研究発表 2

「『伊豆の踊子』研究の現在―どのように読まれ、研究されてきたか―」　鶴見大学名誉教授　　山田吉郎

『伊豆の踊子』研究の歴史はおよそ百年になる。とくに昭和三十年代以降、作者の体験との関連を探究する作家論的研究をはじめ、「謂わばモデル探しから離れた読みの自立性・作品論の可能性」（原善『川端康成『伊豆の踊子』作品論集』「解説」）を拓く研究、さらに比較文学的研究や文体論、教材論、映画・演劇等との関連を探るアダプテーション研究など多様かつ膨大な研究がなされてきた。そうした研究史を押さえつつ、とくに河津・下田の風土と関連する注目点について考察する。

▼シンポジウム「『伊豆の踊子』と下田・河津」

「『伊豆の踊子』読書感想文コンクール」の審査から」　前河津町教育委員会教育長　　鈴木基

伊豆河津の湯ケ野温泉は川端康成ゆかりの地である。嘗て、秋になるとここで文学祭が催され、『伊豆の踊子』の朗読や文学碑への献花などが行われていた。河津町教育委員会ではそうした文学への思いを継承し、「『伊豆の踊子』読書感想文コンクール」を開催してきた。中学生の短作文感想、高校生の作品。成人からの応募もある。コンクールの概要とともに、審査を通してのそれぞれの感想の傾向や特徴や意識などについて報告したい。

「伊豆半島の地形と地質（特に伊豆半島の鉱山について）」　早稲田大学・秋田大学研究員　　川平裕昭

伊豆半島はおよそ 100 万年前に始まった伊豆小笠原弧いずブロックと本州の衝突により現在の位置に定着され、伴う隆起・付加によって海底に噴出した火山砕層岩や溶岩流が地表に噴出している地域である。海底火山活動で形成された湯ヶ島層群や白浜層群には河津鉱山や湯ヶ島鉱山、清越鉱山などの熱水性金銀鉱床が多く知られている。これらの鉱山を中心に伊豆半島に存在した鉱山について紹介したい。

「名作の街・下田の風景」　元県立下田北高等学校長　　渡邉　紘

大正・昭和の下田の町立て、風俗等から『伊豆の踊子』の虚実と創造を探索する。「私」と旅芸人の宿、何故、踊子の「活動」行きは許されなかったのか。別れの朝、栄吉と歩いた通りや「私」の鳥打帽から学生帽への復帰が意味するもの、踊子との哀切な別離は港の何処か、そこへ割り込んできた鉱夫たちとの出会いはあったのか。東京帰りの船中でマントにくるまった少年の述懐等々。そして８年後、川端の下田再訪から、馬車鉄道やスペイン風邪のこと、梶井基次郎の描いた花街下田と三好達治の港町風景を語る。

「小説「伊豆の踊子」とアダプテーションがもたらす可能性」　昭和女子大学大学院教授　　福田淳子

作家川端自身の体験が小説化され、「伊豆の踊子」は文庫や文学全集、教科書掲載などの文字媒体のみならず、映画・演劇・テレビドラマなど多様な形で人々に享受されてきた。それらの表象文化は、観光・交通・産業などにも幅広く影響を与え、社会を動かしてきたと言える。今日に至るまでの「伊豆の踊子」受容の変遷を辿りながら、原作とアダプテーションがもたらす文化の可能性を考えたい。